
非日常という名の日常ッ

ストロンジウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常という名の日常ッ

【Nコード】

N5819Z

【作者名】

ストロンジウム

【あらすじ】

完全オリジナル、

いったいどうなるのか？

それは

私にもわかりません！！

でも、創作よりは指が動きやすかったですw

基本ギャグ要素

増やしたいと思ってるんですができるんだろうか？

始まる前から心配ですw

まっ、【あらすじはその場で決めるもんだ！】　つまりは行き当たりばったり。

たのしかったらいいな

更新は、18時前後にするつもりですw

決して、アクセスが一番よさげだなんて思っていないんだからなッ！

【プロローグ】（前書き）

これが、俺のオリジナルだああ!!!!

【プロローグ】

場所は太陽がジリジリ照り付ける砂漠

「見つけた」

前方に異質な何か（・・・）を見つけてその手に武器を再現させて
バトルフェイス 戦闘体勢に入った。
リプロダクション

そして右手に銃を左腰に再現した刀に添え近くの茂みに身を潜め
その異質な何か（・・・）に鋭いまなざしを向けた。

「タイプ（クシー）か」

ランクで言うとしたから十四番目、昔の自分は倒せなかったが今の自分では何の苦ではない。

そう判断して左腰に差していた刀を収納して、他の武器をその手
クロース に再現した。
リプロダクション

容貌は、中世ヨーロッパ時代に存在していたような剣の柄のみが現れている。

それに刻まれた紋様は何か神々しさを感じるのだが・・・。

「こいつでいいかな？」

剣はギツミツクこそ良いんだけど弱いんだよねうん

まったく、昔このギミックにつられて泣いたやつが何人いたが・・・。

「フエイ」

その声に呼ばれたのか先ほど帯刀していたところに鞘が現れた。
そしてその鞘に柄を入れた。

この剣の特徴の一つであり、巷で【泣かせ】の異名を持つ理由である。

その理由とは、攻撃力弱いくせに毎回納刀しなければ刀身が出てこないという使用があるためだ。

これがあるせいか、よく【縛り武器】として上げられるのだ、ちなみに今もそれと同じ理由で使用している。

「さてさて」

剣の剣に手を添え抜刀準備をして異物を見た。

その様子は、少しだけ人の形に似ていた。

その色は黒というより漆黒に近く心なしか影を思わせるものだった。

そして頭そのに当たる部分には細い三日月のような黄色い目が浮かび上がるように光っていた。

「はああああああッッ！！」

その叫び声と共にくさむらから飛び出し文字通り弾丸を放った。

ダン、ダン、ダン、と放ったび弾は異物に吸い込まれるかのよう
に的確に命中するが。

特にダメージが通った様子は無いままに、こちらに向けてその漆
黒の腕を伸ばした。

「まあ、そうだよな」

こちらに向かって来る腕を見ながらその、拳銃を勢い良く空中に
放り投げて帯刀した剣に手を添えてその腕に抜刀一閃、その勢いの

ままその漆黒の体に袈裟切り、超高速で納刀、そしてもう再び袈裟切りそして終いにもう一度納刀して刀身の出現したそれを異質な何か（・・・）に突き立てた。

それとほぼ同時に、投げていた拳銃を見ずに手にして収納した。クローズ

「おーわりっ」と

そう呟くとその場から文字通り粒子のように姿を消した。

【プロローグ】（後書き）

疲れた疲れた

第一話【最悪の日】

二日後に掲載予定ですw

ではまた会いましょうノシ

【最悪の日】（前書き）

今回の字数4000オーバー…俺的には多い方

【最悪の日】

「ロ・グ・ア・ウ・ト・ツと」

造二（そうじ）は大きく背伸びをして時計を見ると金曜日を示していた日付は変わり深夜の二時を廻っていた。

「ふう〜、今日は終了つと」

だいたい一年前からはじめたこのネットゲーム「英雄の伝説」闇を閉ざすモノ〜」は初めこそ嫌々だったの筈だったのだがいつのまにかハマってしまっていていつのまにかちょっとした有名プレイヤーとなっていた。

現に【刀の探求者】というと、十人に三人くらいは分かるだろうな、うん。

まあ、いいや眠いし、ほんとなんで神さまは人を寝なければいけない体にしたのかね？ど〜うでもいいけど。

そしてノートパソコンを閉じてすばやく布団に入り眠りについた。
だった。

「又クいね・・・」

~~~~~そして時は過ぎ~~~~~

二日たつていつのまにか月曜日。

「ううーん、良く寝たなあ・・・」

いつものように寢床から体を起こし学校に行く準備をした。

悲しいかな、いくら眠たくても行かなければならない、これが悲しいかな学生の性だ。

俺は、いつものように朝食、洗顔、歯磨きといったもののように過ごしていると思ふと気づいた、いつもより日が上がるのが早くないか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うん、本当に時間がヤヴァイや。

一瞬、ほんと一瞬だけだけど時間が止まったように感じた。

このまま止まりつづけたらいいのにそう思うよほんとに。

というか今日ぐらい学校休んでもいいんじゃないか？

なうんて思ったけど辞めておこう、だってアイツ（・・・）がうるさくなるのが目に見えるからしょうがない。

ったくアイツは俺が休んだら家まで来るもんな、学校を途中から休んでまで、ほんとビビッたよあん時は大変だったな、むっちゃ泣いてたからそれ泣き止ませるので大変だったぜ、ほんと、いや、マジで。

・・・・・・・・って、こんな考え事している場合じゃ無かったぜ。

「いつ、行っています!!」

そう叫んで我が家を後にするのだった。

登校状態は端折って・・・・・・・・。

## 校門前

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・やっと、着いた。」

目的地に到着した造二は、久しぶりに全力で走ったためなのか、  
凄い倦怠感を感じながらもその頭を上げた。

「開いてない・・・・・・・・だと!？」

そして驚愕した。

目的地の門は開いていなかった、というか開けた形跡も無いよう  
だった、どうやら遅刻ではないようだった。

でも、だからといって学校があるという状態でもなさそうだ、な  
ぜならここにくるまで一度もおんじょうな格好をした(つまり学  
生)人があんまりいなかった気がする。

結論は・・・・・・・・。

「・・・・・・・・もしかして今日、休みいいい!？」

なぜだ、全く身に覚えが無い。

(というかどういことだだだだ・・・・・・・・落ち着け俺落ち着けえ)

俺は、ケータイを見て確かめる事にした、人間って間違えてしまう時があるからな、うん。

時間・・・・・・・・・・・・・・・・八時三十分・・・・・・・・ギリセー

フ

日にち・・・・・・・・・・・・・・・・『月曜日』・・・・・・・・セーフ

イベント・・・・・・・・・・・・・・・・『国民記念日』・・・・・・はい、ア

ウトオ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・詰んだなこれ」

はあああああああ、と登校途中にもらしたため息の数倍深い感じのため息を出した、

「きょう、ツイてないな・・・・」

ネットゲでは、見たことも無いプレイヤーが絡んでくるし、ネットゲ内で詐欺に会っし登校中にこけるし、定期切れているし、頑張ってきた学校は休みだし、さつき気づいたけど靴の紐ほどけているし・・・・なんか悲しくなってきたぜ、まあまだ良いか、もしこれであいつが来たら世紀末モノだったからな、はっはっは。

「おやおやあゝ？　ここに居るのはいとしのソージくんではないかあ！！」

一体どうしたの？と声をかけて来る見知った少女が一人いた。なんてこった俺フラグ一級建築士の免許なんて取った覚えないんだけど・・・・。

「ん？　そっちこそどうしたよ、千羽」

俺は、先ほど立てたフラグによって現界（笑）した幼馴染の質問を質問で返した。

「えつとねえ、普通に登校してきたらガッコー開いてなくて、なんか変だな〜？　なんて思いながらも暇だったからなんとなくガッコーの周りをぐる〜うって回ってきたらなんとつー！　なんか男の子が校門の前で orz な体勢でいるから誰かな〜？　って見てみたらこれはこれは、いとしのソージくんではないかあ！？　どうしたのだ？　とつとつ壊れたのかあ！？　な〜んて思いながら声かけたのだよ〜」

「・・・へえ、そうなのかお疲れさま」

相変わらずコイツは朝っぱらからテンションが高いな、なんか疲れるぞ。

「もっといたわれ、もっともつとぉー」

「・・・すげーですな千羽サン」

「そつだろそつだろ？　はっはっはー。　・・・・・・・・で、この荷物何？」

「ん？　これか？」

俺は、アスファルトの上に置かれた登校カバンを指した。

「うん、それぞれ。　一体なにがはいってんの？」

すつごく重そうだけど。　と千羽が尋ねる。

「・・・・・・・・PCだ。　しかもデスクトップタイプ」

「ですくとおつぱたいぷ？　何それ？」

千羽はその可愛らしいその大きな目を頭と共に傾げる。  
黙つてるときとこういうアクションする時は可愛いのに、ほん  
と残念だよ。

実際この千羽という幼馴染少女はかなりのレベルだと思う、雑誌のモデルなんか目じゃないね。可愛いというジャンルではの話だけだ。

まあ、もっとも俺はもっと落ち着いた感じで髪が長い方がタイプだからなびかないけどな。

ちなみに黒髪が良い、ここ超重要。

「ああ？ そんな事も知らんのか、お前は？」

「いや分かる分かる、アレでしょ？ あのですくつつぶでしょ？」

「一体……どのデスクトップだ？」

「アレだよアレ、会議とかに置くやつあるじゃん？ 三角の『議長』やら『団長』やか書いてる黒いやつ・・・」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

違ええええええええええ！！

いや違うだろ、それは……ん？なんてやつだっけ？

「**団長**」は書かねえだろ！見たことないし。

それ一体どういふことよ？ 『議長』 いるんだから 『団長』 いらん  
 だろう！！

「ふあになるあんさー？」

ん？それって質問した方が言うやつじゃなかったっけ・・・？

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
残念」

「くう、わあ！」

「賞金の一千万円は、没収です」

「そんなあ」

のつてやるとそんな反応をしてきた、ほんとにコイツノリいいな。  
たまに空気読めないけど。

「不正解だ。 正解は、というか初めから言っているじゃねえかP  
Cだって。 要する机に置くタイプパソコンだ」

「ん？ 机の上に置くタイプ？ もしかして、それってパソコン室  
にあるみたいなやつ？」

「ああ、あんなボロもんじゃないけどな」

「でも一体ソージはどうしてそんなの持ってきてるの？」

なぜ？つてそりやあなあ。

「会長命令だよ」

「ぶちよくめいいい？」

何それと聞いてくるが、そんなもん俺だつて聞きたいわつ。

なんか急にメールが来て、

『部活でPC使いたいんだけど、造二ならいっぱい持ってるだろ？  
すまんけど、いらんやつ持ってきてくれ。』

というか持ってこい、これ会長命令。

PS・なるべく高性能希望。『

ってきたんだ、しかも寝る前に、ほんと俺がPC開いてなかった  
らどうするつもりだったんだろうか？

というか持って来たら持って来たで学校開いてないし、帰るかな？  
祭日だったら、フレンドinしているだろうし。



「よし、帰るか」

「ふえ？ 何で？」

「そりゃあ千羽、今日が学校休みだから……あつ」

「ええっそ〜なの！？ だったら遊びに行こうよ。 ねえねえ〜」

失言だった、千羽「コイツ」に学校がないなんて言ったらこうなる事分かりきっていたのに、何たる不覚、ほんとに今日は最悪の日のようだ。

「ねえねえ〜 どこにする？ ゆ〜えんち？ すいぞくかん？」  
「……………」

そして、こうなった千羽「コイツ」はどうやっても止まらないのだからしたがうしかないな。

すまんフレンドのみんな、夜に埋め合わせするから。

こうして、今日も徹夜が決まった。

「ん……………そうだな、どこにするよ？」

「そ〜だなあ。 んじゃあ今日は買い物行こう、買い物」

「買い物？ 一体どこで？」

「この前いい店見つけたんだよね〜 そこ連れてってあげるよ

！！」

「……………わかった期待しないでおく。 待ち合わせ場所はいつもの

とこでいいよな？」

「うん。 いつもの場所で十時くらいに集合で」

そう言っただけで千羽はいったん離れた。

「ん？ 十時って事は、昼飯おごるって事だよな……」

なんて策士だ、とおもう造二だった。

## 【最悪の日】（後書き）

これに出てきたネットゲームの名前どうしようか？

いいのあったらコメお願いします。

なんせネーミングセンスないんでorz

## 第二話【デート】

更新はいつになることやら（…――）

では、ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5819z/>

---

非日常という名の日常ッ

2011年12月25日18時52分発行